

幻のモダニスト 写真家堀野正雄の世界

主催＝東京都 東京都写真美術館／読売新聞／美術館連絡協議会

協賛＝ライオン株式会社／清水建設株式会社／大日本印刷株式会社／株式会社損害保険ジャパン

会期＝2012年3月6日（火）～5月6日（日）55日間

会場＝東京都写真美術館 3階展示室



左)《風》 1930年 右上)《優秀船に関する研究》1930-31年 『カメラ・眼×鉄・構成』より 右下)《映画会社の女性事務員》 1936-38年

<展覧会概要>

日本の近代写真の成立と展開を語る上で欠かすことのできない、新興写真の旗手として知られる堀野正雄（1907－1998）。その強烈なまでの個性に満ちあふれた作風により、写真家としての名前は知られていますが、実際の活動の軌跡と評価、位置づけは不十分なものと言わざるを得ませんでした。しかし近年、若い世代の写真史研究者はもとより、デザイン史やメディア史の研究者が強い関心を寄せており、その成果も見えはじめています。

本展は、「幻の写真家」ともいふべき堀野正雄の仕事の全体像を明らかにすることによって、1930年代を中心とする写真史にあらたなヴィジョンを構築する展覧会です。1920年代の築地小劇場を中心とする舞台写真やポートレート、舞踊家の写真などにはじまり、写真集『カメラ・眼×鉄・構成』、『犯罪科学』誌を中心とするグラフ・モンターージュ、『NIPPON』や『主婦の友』、『婦人画報』などに発表した報道写真に至るまで、遺族の所有する初公開のオリジナル・プリント作品約100点を中心に、関係資料など併せて200点以上を展示し、戦前の堀野正雄の活動を一望します。日本写真史に重要な位置を占める堀野の全貌に初めて迫る本展は、偉大なる近代写真家の視線とその時代性を体感すると同時に、新しい世代にも注目されているモダニズムの感覚を十二分に堪能できることでしょう。

「百聞は一見に如かず」と云う諺を肯定するまでもなく、我々の欲望は正確に物を観たいということである。歪められた社会生活の中に、僅かに、部分的にはあるが心理に対して素直であり、最も勇敢なのは写真である。人間の詞は応々誤解を招く。個人の観察を何等の膨張なしに報道することは容易なことではない。(略)しかし今日に於ては人類全体が正確に物を観なければいけない。この意味に於いて写真は進展した。

(「写真と機械」『機械芸術論』天人社 1930 年より)

<出品作品・展示構成> (予定)

1. オリジナル・プリント

「築地小劇場」の舞台写真、「乞食」(1932)、「風」(1936)ほか

2. グラフ・モンタージュ

「大東京の性格」(1931)、「首都貫流—隅田川アルバム」(1931)、「玉川べり」(1932)、「終点」(1932)、「蔓延する東京」(1932)ほか

3. 写真集

『カメラ・眼×鉄・構成』(1932 年刊)ほか

4. 雑誌ほか関係資料

『婦人の友』『婦人画報』『NIPPON』など

展示室を大きく「実験」「実践」の2つのパートに分けて構成します。

<本展の見どころ>

1)75年ぶり！初のレトロスペクティブ展！

1930年代を中心に、舞台、ポートレート、ファッション、広告、海外取材など、幅広いジャンルでその才能を発揮した堀野正雄。1937(昭和12)年以来、実に75年ぶりとなる今回の個展では、戦争によって多くの作品が焼失したなか、遺族の全面的なご協力により、貴重なオリジナル・プリント約100点を初公開。多彩な資料を含む全200点超でその軌跡に迫ります。独自の感性で「近代写真とは何か」を突きつめた堀野の初のレトロスペクティブ(回顧)にどうぞご期待ください。



《ポーズ》(崔承喜:さいしょうき)

2)グラフ・モンタージュを発表。「社会生活の中の写真」とは？

堀野は1931年よりグラフ・モンタージュを発表します。グラフ・モンタージュとは、写真と文字を組み合わせ、まるで映画のようにストーリーを語る、この時代独自の写真の表現です。堀野は、「写真」を「写真家」から解放し、社会の中にいかに機能させるかを考えました。その試みは、写真の印刷化により社会生活の中で写真を利用することを実践しています。

展示作品

「大東京の性格」(編集:板垣鷹穂、写真:堀野正雄、『中央公論』10月号)、「終点」(構成:編集部、写真:堀野正雄、『犯罪科学』3月号)、「玉川べり」(シナリオ:北川冬彦、写真:堀野正雄、『犯罪科学』5月号)ほか



《大東京の性格》編輯・板垣鷹穂、『中央公論』1931年10月号より



題不詳（さざえを持つ水着姿の女性）1935・38年

3)“ニッコリ写真”の創始者！

カメラに向かって“ニッコリ”と満面の笑み。この「ニッコリ写真」を最初に撮ったのが堀野正雄です。堀野は、近代的な写真にあいまいなものがあるとは思っていません、と考えていました。笑顔から感じる“含み、悪意、憂い”のようなあいまいさを排除し、ただ単にニッコリするという、今では当たり前前のポーズを初めて実践したのです。

左は汽船会社の広告用にとられた作品です。また、森永ミルクチョコレートのポスター（昭和12年）では、女優の原節子がニッコリと笑う写真が絶大な人気を呼びました。

さらに、昭和10年には、銀座5丁目の森永キャンディーストア2階に日本初の写真壁画を（約3m×約4.5m）を制作し大きな話題を呼びました。



森永キャンディーストアの写真壁画（参考写真）

4)モードに新風を吹きこんだ堀野

堀野はモード写真にも革命をもたらします。単に洋服の形を見せるだけではなく、動的なファッション写真を発表しました。

前出の《風》は、生活とは全く関係のないシチュエーションで撮影されています。大胆なポーズと強風で服の形が認識できませんが、社会を生きぬく近代的な女性を表現しました。

右の作品では、振り袖を着た女性が、近代的な金属の椅子に足を組んで座っています。ハーフのような顔立ち、うつろな目、裾からのぞく艶めかしい足袋。このような和装の表現があったのでしょうか。着物の形よりも、着ることで醸し出される、都会の退廃的なエロティシズムを捉えています。



《題不詳（着物のモード）》 1934～38年

4)写真のハウツー本を発表。アーティストと技術家の2つの顔を持った堀野

堀野は1934(昭和9)年「第5回個人写真展」のあと、1940(昭和15)年に上海の陸軍報道部の囑託として大陸に渡るまでの間に、『正しい露出の写し方』『女性美の写し方』(1938年、新潮社)、『私の写真術』(1939年、新潮社)、『ライカの第一歩』『ライカの第二歩』(1940年、アルス写真文庫33・34)という5冊の写真に関する本を書いています。それは写真論のようなものではなく、いわゆるハウツー本を基本とするものです。堀野は写真を撮ることは、芸術ということより、技術や科学に基づいたものが重要だと考えました。しかし、これらの著書には、内容と一致しない写真も掲載されました。これらの本は堀野にとっては、グラフ雑誌と同じように作品発表の場であり、写真家としての主張でもあったのでしょう。



《女学生の行進》「ガスマスク行進、東京」より、1934～39年

5)1930年代の朝鮮・満洲・内蒙古を記録



左)《朝鮮風俗》
1938年頃
右)題不詳
(正装したモン
ゴルの女性)
1938年

1934年以降、堀野は報道写真家としての道を歩みます。1938年には朝鮮総督府鉄道局の依頼で朝鮮全土の撮影を行い、貴重な記録を残しています。その後は満洲各地や中国大陸各地を撮影取材します。堀野にとっては、グラフ・モンタージュや、現代的な女性美と同じように、これらの支配地も「新しい時代のモチーフ」として捉えていたと考えられます。戦争の時代にあっても、写真の近代化と時代の近代化をひたむきに表現し続けた堀野。終戦後は、写真家とはちがった道を歩み始めることとなります。

<関連イベント>

■シンポジウム「堀野正雄の現代的意識」

日時:4月21日(土)18:00-20:00 東京都写真美術館1階ホール

※展覧会チケットの半券をお持ちの方はどなたでもご参加いただけます。詳細はホームページで発表します

■担当学芸員によるフロアレクチャー

日時:会期中の第2・4金曜日 16:00～

※展覧会チケットの半券(当日有効)をお持ちの上、展示室前にお集まりください

<展覧会カタログのご案内>

展覧会の開催に合わせて、全展示作品と担当学芸員と気鋭の若手研究者によるテキストを掲載した図録を刊行いたします。国書刊行会刊(価格未定)

<ご利用案内>

会期 2012年3月6日(火)～2012年5月6日(日)

会場 東京都写真美術館 3階展示室

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

ホームページ www.syabi.com 電話 03-3280-0099

主催 東京都 東京都写真美術館／読売新聞社／美術館連絡協議会

協賛 ライオン／清水建設／大日本印刷／損保ジャパン／日本テレビ放送網

開館時間 10:00～18:00(木・金は20:00 入館は閉館の30分前)

休館日 毎週月曜日(ただし月曜日が祝日の場合は開館し、翌火曜日休館)

観覧料 一般 700(560)円／学生 600(480)円／中高生・65歳以上 500(400)

※()は20名以上団体料金 ※東京都写真美術館友の会会員、小学生以下および障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料 ※第3水曜日は65歳以上無料

交通機関 JR 恵比寿駅東口より徒歩7分／東京メトロ日比谷線恵比寿駅より徒歩10分

当館には専用の駐車場がございません。お車でご来館の際は近隣の有料駐車場をご利用ください。

<お問い合わせ>

東京都写真美術館 事業企画課 電話:03(3280)0035 FAX:03(3280)0033

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

展覧会担当 金子 隆一 r.kaneko@syabi.com 藤村 里美 s.fujimura@syabi.com

広報担当 久代 明子 a.kushiro@syabi.com 平澤 綾乃 a.hirasawa@syabi.com

前原 貴子 t.maehara@syabi.com